



ニューフェースの登場

中小企業総合研究所 主席研究員 坂東輝夫

中小企業にニューフェース（新顔）が増えてきた、と言うとおかしいだろうか。「タレントではあるまいし、ニューフェースなんかそう出てくるものか」と叱られそうだが、果たしてそうだろうか。

創業がもてはやされる今日この頃だから、日々登場する中小企業は多い。それら誕生間近の中小企業を見ていると、その大きさや生まれ方は決して一様ではないことに気づかされる。それどころか、企業規模も出自も多様化してきており、旧来の中小企業とは異なる企業が生まれていることがわかる。そこで、それら多様な新規登場組をニューフェースと呼んでみたいのである。

もっとも、中小企業のニューフェースと言え、かつてはベンチャービジネスを頭に浮かべる人が多かったと思う。確かに、1970年前後に登場したベンチャービジネスは創業の動機から経営者像、事業内容に至るまで、従来の中小企業とは明らかに異なる面を持っていた。ニューフェースとしての面目躍如たるものがあつた。

しかし、そのベンチャー企業もいまや、

国を挙げての支援ブームの最中にある。新聞を開けばベンチャー企業のニュースが載っていない日はないし、ベンチャー振興政策も目白押しだ。新興株式市場に上場するベンチャー企業も決して少なくない。もはや、ベンチャーを中小企業のニューフェースとは呼びにくい。

では今、どんな企業が中小企業のニューフェースとして登場しつつあるのか。まず指摘できるのは、「1円起業」という特例で創業した中小企業（いや、ミニ）企業だろう。今年2月に施行された中小企業挑戦支援法に基づき、商法で定める最低資本金（株式会社1000万円、有限会社300万円）以下で設立した企業が続々と生まれている。

その数は、11月初旬で6246社、うち資本金1円の企業は238社に達するという。いくら企業規模の小さいのが中小企業だといっても、1円企業はやはり中小企業のなかでも異色と言える。ニューフェースといっておかしくない。第一、1円の資本金を基にどんな事業を展開しようというのか。資本金とは損失を吸収するクッションの役割を果たすが、1円資本金で吸収できる損失のいかに小さいこ

とか。

そういう意味では不安だらけの新顔企業ではある。これら新顔企業の経営者には主婦、学生、お年寄りと、およそプロの経営者とはかけ離れた顔ぶれが並ぶ。従来規模の企業から見ると、創業の動機も違いうだろうし、目指すものも異なるだろう。経営の仕方も、まるで変わっているように思える。しかし、こういう企業が中小企業の一角に登場しつつあることは否定できない。

次に、ニューフェイスとして挙げられるのは、従来の大企業から飛び出して設立された中小企業だろう。たとえば、松下電器産業が閉鎖を決めたモーター工場二つ（福井県武生市と鳥取県米子市）を、従業員が資金を出し合って中小企業として再生させたという事例がある。

松下の工場閉鎖は同社の事業再構築の一環として実施されたが、自らの雇用を守りたいという願いを持つ従業員が新会社を作って、その工場を引き受けたのである。MBO（経営陣による事業買収）ならぬ、EBO（従業員による事業買収）と見ていいだろう。

さらに、新日本製鉄グループを離脱した鋼材商社（大阪市）を、新日鉄の子会社である日鉄商事の社員だった人が買収して、自ら経営に乗り出している事例もある。以前は親会社を向いた経営だったのが、今ではお客を向いた経営に変わっており、むしろ中小企業になってからの方が業績が伸びているという。

大企業からの飛び出し組に限らない。

行き詰まった中小企業を再生させるという形のニューフェイス企業もある。一例は、2000年秋に自己破産した老舗の菓子メーカー（大分市）である。元営業課長らがEBO方式で再建に乗り出し、有限会社として復活させた。

大分県の菓子工業組合が菓子メーカーから買い取っていた商標権を3～5年のリースという形で使用させてもらい、さらに生産設備は破産管財人から応札という手法で手に入れた。そのうえでの企業再生だから、苦勞している。

大企業にしる、中小企業にしる、今は企業のリストラ、破産が相次いでいるから、この種の中小企業は増える一方だろう。素直に事業を立ち上げ、伸ばしてきた中小企業からすると、これらの復活組も異色企業に違いあるまい。あえて、ニューフェイスと名付けるユエンである。

このほか、大企業や金融機関が組成するファンド（投資事業組合）の資金が入った中小企業も増えてきた。中小企業は規模の大きさから見ても、その生まれ方から見ても多様化しつつあるのが現在なのである。

規模や出自の違いから言うと当然のことながら、これら新顔企業の経営手法は伝統的な中小企業とは異なったものだろう。もはや中小企業を単色では描けなくなってきたと言うことではないか。多様な中小企業が様々な行動を取りながら、優劣を競い合う。どうやら、そういう複雑な時代がやってきたようである。